

～小学生のための副読本～

おく 先人からの贈りもの

瓜生岩子・蓮沼門三・中江藤樹の教えから



喜多方市教育委員会

もくじ

一 みなさんへ……………2

二 先人の生き方やその教えに学ぶ……………3

(一) 福祉に一生をささげた瓜生岩子……………4

① 生い立ち

② 福祉に生きる覚悟

③ 貧しい人々のために尽くした数々

《今に語り伝えられる話から》……………10

その一 日本のナイチンゲール

その二 小田付幼学校をひらく

その三 子どもたちを元気にした東京養育院

その四 さつまいもと水アメ

(二) 愛と汗の人 蓮沼門三……………18

① 誕生から少年期

② 東京へ、そして修養団をつくる

③ 「愛と汗」で人づくり、明るい社会づくり

《今に語り伝えられる話から》……………23

その一 偉人伝で心をはぐくむ

その二 ふるさとを美しく

その三 血ぞめの雑巾がけ

(三) 聖人 中江藤樹と喜多方の人々……………34

① 中江藤樹とはどんな人

② 心の学問・藤樹学

③ どのように喜多方に伝わり広まったのか

④ 喜多方の人のすばらしいところ

《今に語り伝えられる話から》……………42

その一 そば屋の看板

その二 荷車が田に落ちた

その三 正直馬子

三 資料……………51

(一) 今に見ることのできる先人のあしあと (二) 人づくりの指針

「未来を拓く喜多方人」

「なかよくたくましく生きる」

(三) これからの私(ワークシート)

— みなさんへ

喜多方に住むわたしたちが尊敬する先人として、瓜生岩子と蓮沼門三、さらには喜多方の人々の生き方に大きな影響を与えた中江藤樹の三人をあげることができます。この本は未来をになうみなさんに、この三人の教えをメッセージとして伝え、先人に興味を持ちたり考えたりするきっかけをつくりたいと思います。

はじめに、それぞれの先人とは、どんな人で、どんな考えを持ちどんなことを行ったかなどについて、分かりやすく書いてあります。次に、みなさんが興味を持って学習できるように、三人の、今に語り伝えられている話をいくつかのせ、先人の考えや生き方について学べるようになっていきます。

この本を読むことによって、先人の考えや行いのすばらしさに、改めて気づくことでしよう。また、どんなに苦しくとも、困っている人やみんなの幸せのため、努力を積み重ね、はつらつと生きた姿に、心を動かされることと思います。これまでの自分を反省し、これから自分はどうありたいかなど、そのヒントをつかむ人がいるかもしれません。

先生や友だちと話し合いながら、それぞれの先人の教えを深く学びとっていきましよう。そして、毎日の生活の中で自分としてやりとげたいことを見つけていける子どもになっていきましよう。



二 先人の生き方や

その教えに学ぶ

(一) 福祉に一生をささげた瓜生岩子

① 生い立ち

瓜生岩子は、文政十二年（一八二九年）に小田付村（喜多方市）北町に生まれました。家は油屋で何不自由なく育ちましたが、九才の時父がかぜをこじらせ肺炎になり急に亡くなりました。その上、火事で家がやけてしまいました。岩子と弟の半治は母につれられ、母の生まれた熱塩の家に移り住みました。熱塩の家は山間の温泉宿屋でしたので、子どもたちはよく近くの示現寺の庭で遊び、和尚さんのお話を聞いたり、読み書きを教わったりしながら大きくなりました。

十四才の時、母の妹で若松に



生誕の碑（北町公園の近く）

年	西暦	こと
文政 十二	一八二九	岩子誕生(父・利左衛門、母・りえ)
天保 八	一八三七	父病死、家火災で焼失、熱塩に移り住む。
十三	一八四二	行儀見習いとして若松の叔母の家に行く。
弘化 二	一八四五	佐瀬茂助と結婚、呉服店若葉屋を開く。
明治 一	一八六七	戊辰戦争 若松に駆けつけ負傷者の手当てをする。
二	一八六九	小田付幼学校を開く。
二十	一八八七	福島へ移り活動を展開する。二年後、福島救育所認可される。
二十四	一八九一	国会へ請願書提出「婦人慈善記章の制」
二十六	一八九三	若松・喜多方・坂下に育児会をつくる。
二十七	一八九四	若松に私立済生病院を開く。
二十九	一八九六	東京下谷に「福島瓜生会水飴伝習所」を開く。
三十	一八九七	藍綬褒章授与される。(女で初)
		一月福島で病床につく、四月十九日永眠

住んでいるおばさんの家へ行儀見習いに
いきました。おばさんの旦那さんは医者
で、お城につとめていましたが、町や村の
人々もみてやっていました。岩子はおば
さんから家事や行儀作法を教わり、叔父
さんからは病人の看病の仕方などを教わ
りました。病気や生活に困っている人た
ちがおおぜいいることも知りました。

岩子が十七才の秋、叔父さんのすすめ
で呉服屋に勤めていた佐瀬茂助と結婚し
て、新しく松葉屋という呉服屋をひらき
ました。二人は仲よく一生懸命働しまし
た。店も繁昌しました。子どもも四人生ま
れました。

ところが、岩子が二十五才の時、夫が肺結核おつと はいけつかくという病氣になりました。その上、店の使用人しょうにんに売上金を持ち逃げされてしまいました。岩子は子どもたちを母にみてもらい、夫の看病かんびようをしながら行商ぎようしょうに励みはげました。

当時はお米の生産も少なく、貧しい人びとが多くいました。その人たちの中で赤ちゃんあちゃんができたという話をきけば、元気な子を産んでくださいとおくりものなどして励ましました。

㊦ 福祉ふくしに生きる覚悟かくご

岩子が二十八才の時、医者いしゃの叔父さんが亡くなり、病氣びやうきの夫も三十四才で亡くなり



示現寺（熱塩加納町）

ました。そしてその翌年母も亡くなりました。岩子は心のささえであった三人を亡くし、生きる氣力を失ってしまいました。示現寺の和尚さんを訪ね、熱塩をはなれてからの生活を細々と話し、そして

「いろいろ苦勞をしてきましたが、子どもたちもそれぞれ生きて行けそうですので、私は尼さんあまになって叔父さん・夫・母の冥福（死後の幸せ）を祈いのって生きていきたいと思ひます。ぜひ弟子にしてください。」

と頼たのみました。

静かに岩子の話を聞いていた和尚さんは、きつと目をすえ

「岩子、お前のこれまではたしかに苦勞の多いものであった。しかし、落ち着いてよく考えてみなさい。お前は自分だけが不幸を背負いこんでいるように思っているようだが、世の中をみてごらん。食べ物もなく腹をへらしている人、病気でねたきりの人、それらの人びとにくらべると、お前は丈夫な体をもっているではないか。どうだ、これから困っている人びとの相談相手になって生きていったら。」

と、さとされました。



瓜生岩子の銅像（浅草）

岩子は、今まで自分のことだけに悩んでいたことを知らされました。

岩子は、「そうだ、和尚さんのいうとおり、いままでの経験けいけんを生かし、困っている人たちの助けになるようなことをして生きていこう」と心に誓ちかいました。

③ 貧しい人びとのために尽くした数々

世は江戸時代から明治に代わりましたが、国民の生活はさっぱりよくなりました。国のお金も福祉ふくしにはつかわれませんでした。岩子は、困っている人がおおぜいいることに心を動かされて、自ら

進んで喜多方から若松・福島へ、そして東京へと活動の場を広めました。育児会をつくって乳児の養育に力をかし、貧しくて病院にも行けない人のために病院を開いたり、少しでも腹をへらしている人の助けになればとあめかす利用のパン作りを広めたり、さつまいもであめを作り、そのあめかすを利用したお菓子を考えたり、細かいことにまでも心を用いました。

長い間の活動で健康を害したのか、岩子は、明治三十年（一八九七年）一月福島で病床についてしまいました。岩子が病氣になったと聞かれた皇后陛下から、お見舞いのお菓子を贈られました。

しかし、四月十九日息をひきとりました。六十九才でした。

岩子の一生は福祉のためにささげたものでした。亡くなったのちも多くの人びとから敬い、慕われ、各地に銅像が建てられ、その業績が大きくたたえられ語りつがれています。私たちも郷土のすぐれた人として学んでいきましよう。

その二 日本の子ナチンゲール

明治元年（一八六七年）新政府軍と幕府に味方する藩との間で戊辰戦争が始まりました。新政府軍が若松城下に攻め入ってきて戦いがくり広げられました。岩子は子ども三人を若松に置いてきているので心配で出かけました。若松城下に来てみると、町の方々できずつき倒れ苦しんでいる多くの人を目にしました。これは捨ておけないと小田付にもどり、包帯これは捨ておけないと小田付にもどり、包帯やきず薬をできるだけ集め、食べ物も準備し、若者たちを頼んで荷車に積んで若松に出向きました。



そして、空き家を借り負傷した人をつぎこみ、敵味方の区別なく手当てをし、腹をすかしている人には食べ物あげました。これを見た新政府軍の隊長が

「お前はだれの許しをもらってやっているのだ。」

と、とがめてきました。岩子はきつと眉をあげ、

「けがした人を手当てするのに誰の許可がいるのですか。」

と、毅然としてこたえました。

「お前の名前は。」

「はい、瓜生岩子と申します。」

このことがたちまち新政府軍の中に広がり、後に「日本のナイチンゲール」といわれるようになりました。

◆若松城下での戦いの際、敵味方の区別なく手当をし、食べものをあげる岩子をどう思いますか。

その二 小田付幼学校をひらく

戊辰戦争は会津の降伏^{こうふく}でおわりました。会津の武士は猪苗代と塩川に集められ、そこから東京と高田（新潟県）へ送られ^①謹慎を命じられました。若松城下は治安^{ちあん}が乱れていたため、女や子ども約四千人が喜多方地方の村むらへ避難^{ひなん}して身をよせました。お父さんや兄さんがいなくなった子供たちは、教え導く人もなくわがままほうだい、畑のものをとったり、にわとりを追いまわしたり悪さがたえませんでした。岩子はこれを心配し、「こんな悪さを捨てておいたら決してよい人間に育たない。ぜひ学校をつくって勉強を教えてやりたい。」と、本気になって考えました。いろんな人にこのことを話し、協力を得て、学校を開く願い書を民政局^{みんせいきょく}へ提出しました。

そのころ、学校を開くには役所の許しが必要でした。民政局は近くの満福寺にありましたので、毎日のように「お許しはまだですか」と催促^{さいそく}しました。役所は岩子の子どもを思う心とその熱心さにまけて、ようやく許可してくれました。

岩子は若松の店を閉めた時のお金を使い、二つの部屋の学校をたて小田付幼学校

としました。子どもたちをあつめ、日新館の先生で喜多方に避難していた浅岡先生に勉強を、佐川先生に習字をお願いし、岩子は女の子どもたちに裁縫ほうを教えました。岩子の熱心な取り組みもあって悪さがなくなり、明るい子どもになりました。

明治三年（一八七〇年）、会津藩はゆるされて青

森県に斗南藩三万石があたえられました。注2 東京や

高田に謹慎していた武士たちが会津に引き上げてきて、家族をつれて斗南へ向かいました。そのため幼学校は閉じられました。二年間の短い勉強でしたが子どもたちにとっては大きな力になりました。

注1 言行をつつしみ、他との交際をひかえること。

注2 火山灰の風雪厳しい不毛の土地で、旧藩士と家族約一万七千人が移住している。



その三 子どもたちを元気にした東京養育院

明治二十四年（一八九一年）、福島で活躍していた岩子は、東京養育院に入っている子どもたちに元気がないので面倒をみてくれないかと頼まりました。岩子は早速^{さっそく}出かけました。養育院には約二百人の子どもたちがいました。いろんな不幸な事情で親もとからはなれている子どもたちなので、元気がなく笑い顔などありません。岩子は自分のまわりに子どもたちを集め、母親のように一人ひとりに寄りそい、ぞうりの作り方を教えたり、ぼろ布を細かにさかせたりしながら、いろいろな話を面白くわかりやすく語ってきかせました。そ



ういうことを幾月も続けているうちに、子どもたちの目に元気がみられるようになってきました。

岩子はこれまで、自分ひとりで二百人を超える人びとを助けてきましたが、これ以上は力がおよびません。これからは多くのご婦人方の協力で進めていきたいと考えました。そのため国会に、「貧しい人びとを救うためにお金を寄附してください」くんしょうとお願いを出して人々に、国から勲章をあたえるという法律をつくってください」とお願いを出していました。その願いが通るように、夜になると国会議員や有名な人びとをたずね、

「今、国会に婦人記章の制をお願いしています、ぜひ通してくださいようにお骨折りください。」

と、毎晩のように歩きまわりました。しかし、この願いは通りませんでした。子どもたちも元気になり、自分がそばにいらなくても大丈夫になったと、半年ほどで喜多方へ帰ってきました。

◆岩子が、小田付幼学校を建てたり、東京養育院の子どもの世話をしたりしたのは、なぜだと思いますか。

その四 さつまいもと水アメ

明治のころ、さとうは高級品こうきゅうひんでした。ふつうの家では水アメを甘味料かんみりょうとしていましたので、それぞれの家でアメを作っていました。岩子も母に作り方をならっていました。炊たいたもち米にもやしを混ぜまぜ、発酵はっこうさせて作ります。

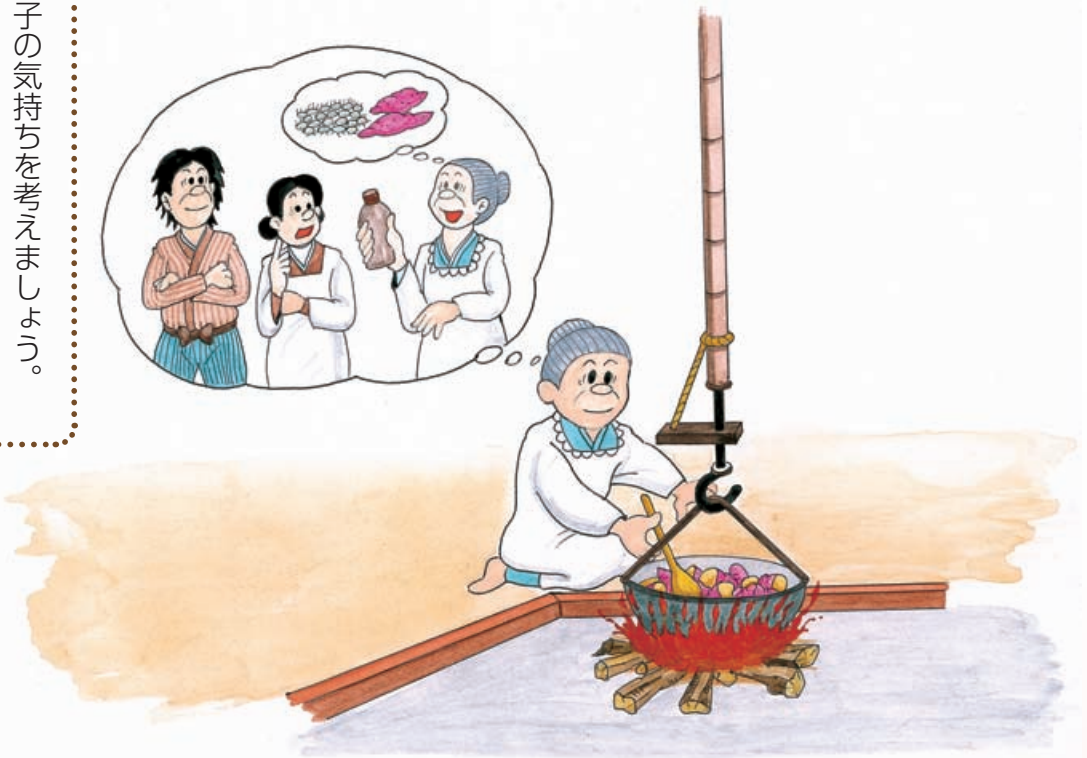
岩子は、貧しい子どもたちのために、アメを作ってあげたいと思っていました。あ
る時、もち米は炭水化物、さつまいもも炭水化物、それならさつまいもでもアメがで
きるのではと思うようになり、いろいろ試してみました。何度も失敗を重ねながら試
しているうちにアメができました。高価こうかなもち米を使うより、値段の安いさつまいも
を使ったほうが多く作れることがわかり成功したのです。また、そのアメかすを利用
したお菓子の作り方も考えました。岩子はさつまいもの苗なえを買って福島地方の農家
に広めました。

明治二十七年（一八九四年）、岩子は東京に家を借り、「福島瓜生会支部水飴伝習所うりゅうかいしぶみずあめでんしゅうじょ」
を開き、各県の知事をお願いして生徒を出してもらい、さつまいもでの水アメの作り

方とアメかすの利用法を教えまし
た。各県から出された生徒数は数百
人にもなったといわれています。

この時作られた水アメの中から
一二〇キログラムを、戦争でけがを
して入院している兵隊さんにもお見
舞としておくり、よろこばれました。

- ◆さつまいもで水アメを作ることができたときの岩子の気持ちを考えましょう。
- ◆岩子の生き方から、あなたはどのようなことを学びましたか。



(二) 愛と汗の人 蓮沼門三

① 誕生から少年期

日本の社会教育の発展に尽くし、喜多方市名誉市民第一号となった蓮沼門三は、明治十五年（一八八二年）二月二十二日に、福島県相川村（喜多方市山都町）に生まれました。その誕生は、なんと吹雪の中、しかも道ばたのことでした（今その場所は、「愛汗苑」という記念公園になっていて、門三の銅像などがあります）。そのわけは、母モトが旧正月のあいさつのために夫の実家に行った帰り道で急に産気づいてしまい、そこで産んだからです。実はこの時、門三の父の高橋岩四郎は関西方面に熊の胆（薬）を売りに出かけていました。春



蓮沼門三（87歳）

になっても連絡がなく、父はそのまま行方不明になってしまい、門三は父の顔を知りません。

門三が三才の時、岩月村（喜多方市岩月町）の蓮沼家でお手伝いの人を探していたので、母は門三を連れてそこで働くことにしました。しばらく後に、母は

この家の市太郎と再婚し、高橋門三は蓮沼門三と名前が変わりました。

② 東京へ、そして修養団をつくる

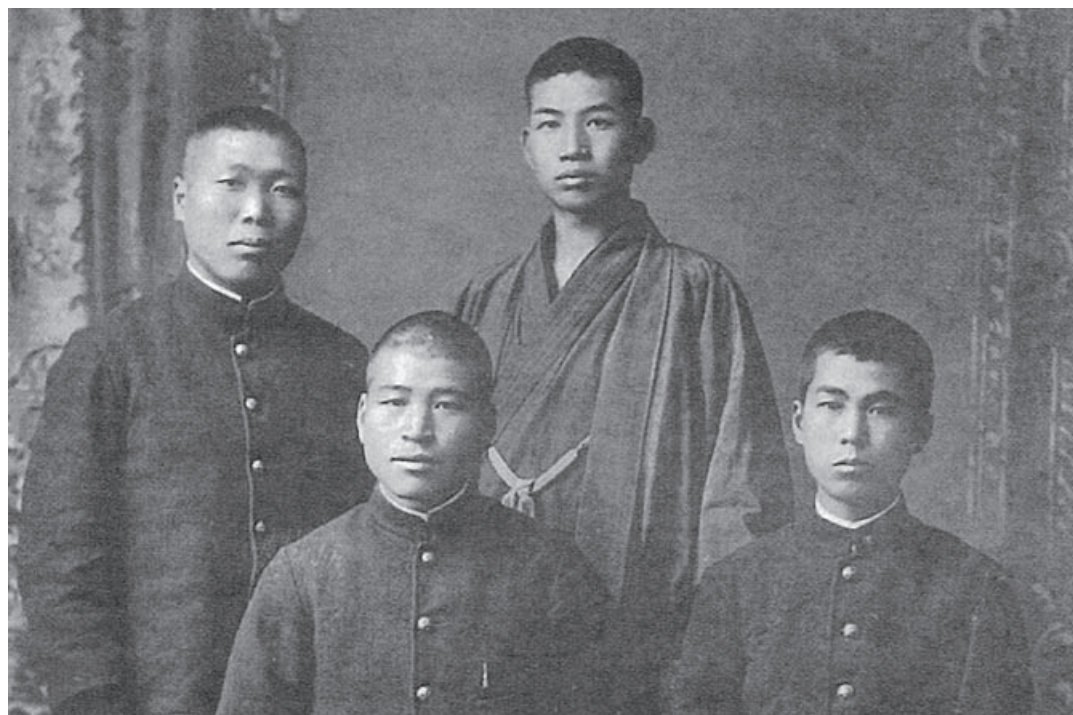
門三は十五才の時に飯豊山に登り、心と体をきたえ、また、友だち十二人と米沢街道の美化掃除をおこないました。そして、わずか十五才で岩月尋常小学校入田付分教室の代用教員（臨時の先生）になりました。

その後、もっと勉強がしたいと思い、二十一才のとき、東京府師範学校（今の東京学芸大学）を受験し合格しました。入学して学生たちが寝泊りする寄宿舎

年	西暦	ことば
明治 十五	一八八二	門三誕生（父・高橋岩四郎、母・モト）
三十	一八九七	岩月尋常小学校入田付分教室の代用教員になる。
三十六	一九〇三	東京府師範学校に入学して寄宿舎に入り、一人で雑巾がけを始める。
三十九	一九〇六	学生仲間四百人と修養団を設立。
四十一	一九〇八	機関誌『向上』を発刊。広く社会に修養団の願いを訴える。
四十二	一九〇九	渋沢栄一に面会。以後、渋沢は熱心に修養団を支援する。
大正 四	一九一五	桧原湖畔で第一回青年指導者天幕講習会を開催、以後各地で開催される。
十二	一九二三	修養団が財団法人として認可される。
昭和 四十七	一九七二	関東大震災の直後、修養団は救護部をつくり被災者支援を行い、以後、各種のボランティア活動を展開する。
四十九	一九七四	喜多方市名誉市民第一号となる。
五十五	一九八〇	社会教育への功労により勲二等瑞宝章を受ける。
		逝去

に入ると、あまりの汚きたなさに驚おどろきました。それで、朝早くと夜おそくに廊下や便所の雑巾ぞうきんがけを一人ではじめました。たった一人で雑巾がけを半年以上続けた一月のある寒い朝のことです。手のあかぎれから血がふき出しても気にしないで雑巾がけをする門三の姿を見て、一人の学友がくゆうが心をうたれ、一緒に雑巾がけをするようになりました。これに続いてほかの多くの学生も雑巾がけをするようになり、汚まかった寄宿舎はあっという間にきれいになりました。

このことがきっかけとなって、門三が二十三才の明治三十九年（一九〇六年）、「みんなで力を合わせて学校や社会を良くしてい



修養団をつくった仲間たちと（左が門三、23歳）



子ども自然体験キャンプ（桧原湖畔）

こう」と、学生など四百人が集まって、修養団という団体をつくりました。

③ 「愛と汗」で人づくり、明るい社会づ

くり

師範学校を卒業した門三は、東京で小学校の訓導くんどう（先生）になりましたが、「愛」の心でみんなが仲良く、共に努力の「汗」を流して、すべての人が幸せになる明るい社会をつくろうと、修養団の活動も続けました。二十七才の時、日本経済の近代化を進めた渋沢栄一しぶさわえいいちに面会して、「愛と汗」の大切さを説明し、修養団に協力してもらえるようになりました。二十八才からは、先生をやめて修養団活動だけに力

を入れることにしました。

その後、愛と汗の修養団運動は全国の学校や地域、企業に広がっていきました。また、日本で初めての組織的な教育キャンプ「第一回青年指導者天幕（テント）講習会」を桧原湖畔で開催しました。この講習会は、その後も全国各地で開催され、たくさんの青年指導者を育て、その講習会でおこなわれた国民体操は、ラジオ体操の元になりました。

蓮沼門三は、昭和五十五年（一九八〇年）六月六日に九十八才で亡くなりましたが、前日まで修養団の活動に力を尽くしました。修養団は、できてから百年を越えた今も、「子ども自然体験キャンプ」や「青年ボランティア活動」、「大人の心の教育」を全国各地でおこなっています。

※喜多方蔵の里には、「蓮沼門三資料展示室」と「愛汗の碑」があります。

その二 偉人伝で心をはぐくむ

門三の父・岩四郎が関西方面で行方不明になってしまい、母モトは、岩月村（今の喜多方市岩月町）大沢の蓮沼（はすぬま）という家で、お手伝い（てつだい）の人を探（さが）しているとの話を聞き、そこで働くことにしました。

門三を背負（せお）い、蓮沼（はすぬま）家を訪（おも）ねたモトは、家の前で思わず立ちすくんでしまいました。それは、あまりにもさびれた家で、しかも、のぞいて見ると、息子（むすこ）は一人ではなく三人もいたからです。しかし、思いなおして蓮沼（はすぬま）の家に入ると、彦吉（ひこきち）さんとその息子・市太郎（いちたろう）たちは、喜びのうちに二人をあたたく迎（むか）えてくれました。

日がたつにつれて、門三は、やさしい彦吉（ひこきち）さんにすっかりなついてしまいました。そんなある日、彦吉（ひこきち）さんがモトに、

「市太郎（いちたろう）の嫁（よめ）になってほしい」

と言い出しました。モトは、働き者で心の優しい市太郎や彦吉じいさんにすっかりなついている門三を見て、結婚を決意けつゐしました。

彦吉じいさんは、ことのほか門三をかわいがりました。町に出かけたときは、かならず本やお菓子かしをみやげに買かってきてくれました。その本は、絵草紙えぞうしといつて、(注1)くすのきまさしげ楠正成や豊臣秀吉ひでよしなど歴史上の偉い人の話を子どもむけに書いて絵をつけたものでした。本の大好きな門三は、このような偉人いじんの話から、理想りそうを高く持つこと



や、正義感せいぎかんや行動力こうどうりょくが大切なことを学びました。また、蓮沼家かみさまが神様ほとけさまや仏様を大切に
する信仰心しんこうしんのあつい家庭であったことや、飯豊連峰いいでれんぼうをのぞむ自然しぜんが美しかったこと
から、幼い門三おさなの心に感謝かんしゃの気持ちや生きるよろこびがはぐくまれました。

その後、門三には一男七女の弟や妹ができました。父母が朝から晩まで働く姿を見て、少しでも助けてあげたいと、いやがらずに予守りもしました。小学校に入ってから、弟や妹の手を引き、一人をおぶって学校へ行ったこともあります。教室で赤ん坊が泣きだすと、門三は席を立ち、廊下に出たままで先生の話聞いていました。どんな時でも、勉強とお手伝いをがんばる門三でした。

注1

鎌倉幕府討伐に参加した勇壮な武将。忠臣として人々に敬愛された。

注2

戦国時代、人間的な魅力と政治力で天下統一をなした。

その二 ふるさとを美しく

門三は、本からいろいろなことを学びました。偉人といわれる人は、みんな自分の損得をはなれて、社会や国のために働いていることを知り、心をうごかされました。ついには、偉人たちが自分の理想像になりました。同時に、その偉人のことをみんなにも教えたいと思いました。

それで、友だちや村の人たちに本を読んであげたのです。門三の朗読はなかなか上手で、村中の評判になりました。テレビもラジオもない時代でしたので、あちこちの家からひっぱりだこです。そのたびに出かけていっては、いろりの火を囲みながら、歴史物語や偉人伝などを読んであげました。

門三は、大人になってから

「わたしは、少年時代いつとはなしに、なんとかして自分の住んでいるふるさとを美しく、争いのないすばらしいところにしたいと強く思うようになった。」

と話しています。

このような気持ちから、門三は村の美化活動びかかつどうをはじめました。まず、十二人の友だちをさそって、村の道の掃除そうじをはじめました。大沢おおさわをとる米沢街道よねざわかいどうは、人や荷物にもつをはこぶ馬のふんなどですいぶん汚よごれていました。特に、春の雪どけのころは、馬ふんが雪どけの水といっしょになってとても汚きたなかったです。そんなところを掃除するのはたいへんでしたが、門三たちは力をあわせて実行しました。その結果、道はすっかりきれいになり、道ばたには門三たちが植えた花がきれいに咲き、村の人たちにたいへん喜ばれました。

人に喜ばれることの喜びを知った門三は、さらに自分が本ほんを読んで感動かんどうした二宮尊徳そんとく（一七八七〜一八五六年 通称・金次郎）の生き方や考え方を幻灯機げんどうきで紹介しょうかいし、村のみんなに見てもらおうと考えました。二宮尊徳は、江戸時代えどじだいの人で、農業のうぎようを熱心ねっしんに研究けんきゆうして、農家の人々を助けたりっぱな人です。幻灯機は今のプロジェクターに

② 江戸時代後期の農政家。幼くして両親を亡くすが、独学で学問を修め、各地の農村復興を指導する。



似たもので、幻灯機の中においた絵や物を写し出すので、お話する以上にわかりやすいと、門三は考えたのです。しかし、当時の幻灯機は高価で、簡単には買えません。

そこで、門三はアルバイトをしてお金をつくることにしました。それは、天然氷を売ることでした。大沢の東北にある大仏山のふもとには、小さい沼がいくつもあります。冬になると沼に氷が厚くはります。この天然氷は、野菜の輸送などに使われていました。それで、門三たちはこの氷を切り出し、雪道を

そりに乗せて喜多方の氷会社まで運んで買ってもらいました。

こうしてお金をため、やっと幻灯機を買うことができました。門三は、二宮尊徳を物語にして、自分たちで何枚もの絵を描かきました。この絵を幻灯機で写うつし出し、門三が物語を話しました。映画えいがなどなかったころですから、村の人たちは大喜おおよろこびでした。

少年時代からよく働き、よく勉強した二宮尊徳の幻灯を見た村の青年たちは、自分たちの村のことや農業のことを真剣しんけんに考え、よりよい村にしようと話し合うようになりました。まさに、今の視聴覚教育しちようかくきようと同じことを、門三は少年の頃ころから自分で考え実行したのです。

その三 血ぞめの雑巾がけ

門三は、小学校入学のころから「小学校の先生になりたい」と思っていました。ですから、少年時代から学校が終わった後は畑仕事をし、手があいているときは歩きながら本を読むほどでした。夜は夜で、つかれていても勉強を続けました。

門三が喜多方高等学校を卒業した十五才の秋、准教員の検定試験を受け、合格しました。そして、岩月尋常小学校の入田付分教室で、臨時の先生として働きはじめました。

向学心に燃えている門三は、さらに上の学校に進みたいと思いました。そして十九才のとき、今の福島大学人間発達文化学類（旧教育学部）である福島師範学校を受験しました。筆記試験はよくできましたが、その後の口頭試問（面接試験）会場と身体検査会場をまちがえ不合格となってしまいました。しかし、それで先生になる夢をあきらめるような門三ではありません。門三は、ちょうど学生募集のあった東京府師範学校（今の東京学芸大学）を受験する決心をしました。

ある朝、もういちど福島師範を受験するふりをして家を出ました。門三が二十一才の秋のことです。会津若松から汽車に乗ってすぐ、父母にうそをついたおわびの葉書を書こうと荷物にもつをあけた時、葉書のそばからお金が落ちました。母がそっと入れてくれたお金でした。門三のうそを知っていて、お金まで入れて送り出してくれたのです。泣きながらお金を握りしめ、父母ふぼに感謝して門三は東京へ向かいました。

父母の祈りいのがつうじたのか、門三は、東京府師範学校の試験にみごと合格。しかし、入学した門三は、学生が寝泊りねとまする寄宿舎きしゆくしゃに入ってその汚さにびっくりしてしまいました。それは、学生たちが泥だらけの靴や下駄げたで寄宿舎の廊下を歩いていたからです。それは禁止きんしされていることでした。門三は、将来しょうらい、子供たちのお手本となる先生をめざす学生がこれで良いのだろうか、と思いました。

口でえらそうなことを言うより、自分ひとりでも廊下や便所をきれいにしようと、門三は決意し、人より一時間早く起きて、廊下の雑巾がけをはじめました。しかし、きれいになった廊下をわざとよごす人もいます。しかし、じつとがまんし、「よし、夜もやろう」と、勇気をふるいたたせて、毎日毎日、朝と夜に掃除を続けました。すると、

「邪魔だ。」

などといって、水のはいった雑巾バケツをけっ飛ばす人もいました。しかし、門三は自分で決心した以上、あきらめてはいけないと、一人がんばって雑巾がけを続けました。

一月の寒い朝でした。門三はいつものように冷たい水の入ったバケツに手を入れて雑巾をしばりました。すると、手の甲のあかぎれが切れ、水はあっという間に血で真っ赤にそまりました。しかし、かまわずに門三は雑巾がけを続けました。そこに、この間バケツをけっ飛ばした学生が通りがかり、真っ赤にそまったバケツの水を見たのです。その瞬間、門三の真心がその学生の心を打ちました。その学生は、バケツをけった自分を心から恥じて、

「蓮沼くん、すまなかった。今日からばくも一緒に雑巾がけをするよ。」

と涙を流しながら門三の手をにぎったのです。それから、続々と仲間が増え雑巾がけをはじめました。寄宿舎はあっという間に見ちがえるほどきれいになりました。

このことがきっかけとなり、「一人ひとりが、愛（親和）と汗（努力）を実践して人格



を向上させ（修養）、みんなが幸せになる
明るい学校や社会をつくろう」と、四百名
の仲間が集まって修養団をつくりまし
た。明治三十九年（一九〇六年）二月十一
日、門三が二十三歳の時でした。

- ◆ 真っ赤にそまったバケツの水を見たとき、以前バケツをけつ飛ばした学生は心の中でどのようなことを思いましたか。
- ◆ 自分で決めた目標をあきらめないで最後までやりとげたことはありますか。また、やりとげた時の気持ちはどうでしたか。
- ◆ 門三のどのような生き方を学びたいと思いますか。

(三) 聖人 中江藤樹と喜多方の人々

① 中江藤樹とはどんな人

中江藤樹は、江戸時代ははじめのころの人で、今から約四百年前の慶長十三年（一六〇八年）近江の国（滋賀県）、琵琶湖の西側にあたる小川村（高島市）の農家に生まれました。

小さい頃の名前は、与右衛門といいました。九才で武士であつたおじいさんと一緒に親もとをはなれることになりましたが、もともと本を読むことが好きだった与右衛門は、おじいさんが持っていた本のほとんどを読むこと

年	西暦	こと
慶長十三	一六〇八	中江与右衛門（藤樹）小川村に生まれる。
寛永十一	一六三四	以後、祖父の養子になり、武士として米子、大洲で過ごす。
慶安元年	一六四八	大洲藩を脱藩し浪人となり、ふるさと小川村に帰り、塾を開く。
延宝年間	一六七三～一六八一	中江与右衛門（藤樹）亡くなる。（四十才）
寛文十年頃	一六七〇年頃	若松の医師 大河原養伯、荒井真庵が京都で淵岡山に藤樹学を学び、これを会津に持ち帰る。
天和三	一六八三	矢部惣四郎が京都に出向き藤樹学を学ぶ。
		五十嵐養庵、遠藤謙庵、東条方秀が京都に出向き、淵岡山から藤樹学を学ぶ。
		喜多方地方で「清座」という勉強会が行われ、藤樹学が盛んとなる。
		国を乱すとみられ禁止令が出される。その二年後、禁止令が解かれる。



ができるようになり、その内容も理解するまでになりました。十五才から伊予の大洲藩（愛媛県）の武士となりましたが、武士になってからも「学問は人の生きる道を学ぶもの」と考え、中国から伝わってきた「^{注1}十三経」や「^{注2}四書」などを毎晩勉強しました。そして、同じ武士のなかに教えるようになりました。

二十七才のとき、病身で一人暮らしの母を案じ、ふるさと小川村にもどり、塾をひらき、近所の村人や武士に「人としての道」などを教えていました。その人からは、まわりに対して平等でわけへだてもなく、地域の人からも尊敬され信望厚く、聖人とまでいわれるようになりました。

この与右衛門の家の庭には、一本の大きな藤の木が^{ふじ}あ

^{注1} 生活の中で心がけることがらを書いた十三種類の書物。

^{注2} 「大学」「中庸」「論語」「孟子」の四つの書物。



りました。人々はいっしか尊敬の心をこめて、与右衛門を藤の木先生、藤樹先生と呼ぶようになりました。

与右衛門は、四十一才の若さでなくなりました。

② 心の学問・藤樹学

中江与右衛門のひらく塾は、「人としての生き方」や「毎日の生活の中でどのように暮らしたらよいか」などをお互いに考え学ぶ塾でした。

その時代、小川村などでは特に勉強などするところもなく、文字などは読めない人がほとんどであり、その中で与右衛門は、人としての生きる道が何よりも大切なことであることを、まわりの人々に一生けんめい教えました。

その塾は農家の人、馬方や商人など勉強をしてみようという人は、どんな人でも気持ちよく受け入れました。

そこでは、「正直であること」「人を思いやること」「知恵をはたらかすこと」の三つを、たとえ話を用いながら、共に学び、それをそれぞれの生活のなかで実行していきました。

そのうち、この与右衛門の評判をきいて、武士や学問のある人まで塾を訪れるようになりしました。

やがて、その教えが日本中に広まるようになると、この藤樹の学問や考え方を「藤樹学」とよぶようになりました。

それでは、「藤樹学」の考えの一部を紹介します。

○致良知（ちりょうち・りょうちにいたる）

人はだれでも生まれながら美しい心（良知）をもっている。このことを常に心がけていけば、身分や学問みぶんに関係なく立派りっぱな人になれる。

○五事を正す（ごじをただす）

美しい心（良知）になるための工夫くふうとして、五事を正すことが大切である。

五事とは、顔つき、言葉づかい、視ること、聴くこと、思いの五つのことで、これを「貌（ぼう）・言（げん）・視（し）・聴（ちよう）・思（し）」といっています。

なごやかな顔、思いやりのあることばづかい、人や物事を正しくみる、本当の気持ちをお聴く、よい思いをもつ、この五つのことをつねに心がけて生活しようということです。

○「孝」の考え方

親孝行の「孝」です。まず、親が子どもに「孝」をつくす。親の孝をうけた子どもは必ず親に「孝」をつくす子どもになるだろうという考えです。

親の子どもへの「孝」は、「心から愛情をそそぎ育てること」「心身とも丈夫な子どもに育てあげること」「将来のためのしつけや社会のきまりを教えること」などがあります。

この親の子どもへの「孝」はやがて、子どもが、お父さんやお母さんを尊敬する、大切にするという、親に対する「孝」へと変わっていきます。

さらに、「孝」は親子の関係だけでなく、家族はもちろんのこと、地域のまわりの人々や人間関係のなかにもいかしていかなければならないということです。

この「藤樹学」の教えが喜多方市にも入ってくることになります。

③ どのように喜多方に伝わり広まったのか

寛文十年（一六七〇年）頃の江戸時代、北方（喜多方）の矢部惣四郎やべそうしろうという人が、京都で中江藤樹の門人であった淵岡山先生ふちこうざんから藤樹学を学びました。それが会津に入ってくるものになります。

矢部惣四郎はふる里に帰ると、さっそく五十嵐養安いがらしようあん、遠藤謙安えんどうけんあん、東條方秀とうじょうほうしゅうの三人に藤樹学の内容を話します。これに感動した三人も、まもなく京都にでかけ淵岡山先生から藤樹学を学び、それを北方（喜多方）に持ち帰り関心をもつ多くの人に教えました。

こうして、北方（喜多方）の藤樹学は発展することになり、それは明治時代の初めまでつづき、その後の北方（喜多方）の人の気質や文化にも大きな影響をあたえました。

北方（喜多方）においても、この藤樹学を勉強に集まったのは、中江藤樹の住む近江とおなじく、当時の村役人や郷頭注1、肝煎注2、農民や商人などで、そして一番さかんであったところは、千人位の人が勉強していたともいわれています。

注1

いくつかの村を治める一番の者。

注2

名主、庄屋および集落のまとめ役。



この勉強会は女性の参加者もいて、身分の上
下わけへだてなく平等にだれでもが学ぶことの
できる場であり、とても江戸時代では考えられ
ないことでありました。

喜多方地方では、この勉強会を「清座^{せいざ}」といっ
ていました。

④ 喜多方の人のすばらしいところ

喜多方の人のすばらしいところは、「人として
の生き方」や「毎日の生活をどのように暮したら
よいか」など、藤樹学の教えをすすんで学んでい
ったことです。

そのすぐれた点をあげると、

一つめは、勉強をしようとする「前向き的心」

です。藤樹学を勉強しようと京都まで出かけました。今では新幹線や飛行機であつというまに京都へ行くことができますが、江戸時代にあつては歩いて行くしかありませんでした。

二つめは、学んだことを、喜多方に持ち帰って広めたということです。

三つめは、持ち帰った中身を勉強しようと、多くの人が集まったということです。

それにしても、勉強をしてみようと考え、それを実行にうつす気持ちをもっていたのにはおどろきます。

喜多方の人が、このような前向きの心を、昔からもっていたということがよくわかります。

わたしたちは、このように先人の進んで学ぼうとした心を誇りにしたいものです。



その二 そば屋の看板かんばん

鴨村かもむら（高島市出鴨）に、一軒いっけんのそば屋がありました。

その主人は、藤樹先生がりっぱな学者だといううわさを耳にはさみ、店の看板かんばんの字を頼たのみに行きました。

先生は、多忙たぼうの日々をおくっていましたが、主人の願いをこころよく引き受けてあげました。

十日ほど過ぎて、主人は先生の家に行きました。

「まだ書けてはおりません。もうしばらく待ってください。」

主人は、がっかりして家へもどりました。

それからまた十日か、二週間ほどたって、ふたたび主人は先生の家をおとずれました。

「はい、看板はできておりますよ。」

みごとに書かれた看板をさしだされ、主人はたいそう喜びました。

「ああうれしや、これで商売も繁盛^{はんじょう}まちがいなし。」

家にもどった主人は、さっそくそれを店の軒先^{のきさき}につりさげました。

ある日、加賀^{かが}の国^{くに}（石川県）からやってきたお殿様^{どのやま}の行列が、そば屋の近くで休息^{きゅうそく}をとりました。

そこで家来^{けらい}が、お殿様にお茶をさしあげようとそば屋をおとずれたところ、店の看板の字に目がとまりました。

「主人、店の看板はなかなかみづことな字で書かれている。殿様にさしあげたいので、わけてもらいたい。」

家来は、財布^{さいふ}から大金を取りだして主人に見せると、主人は、

「へえ、喜んでさしあげます。」

と、こころよく返答^{へんとう}して、看板代を受けとりました。

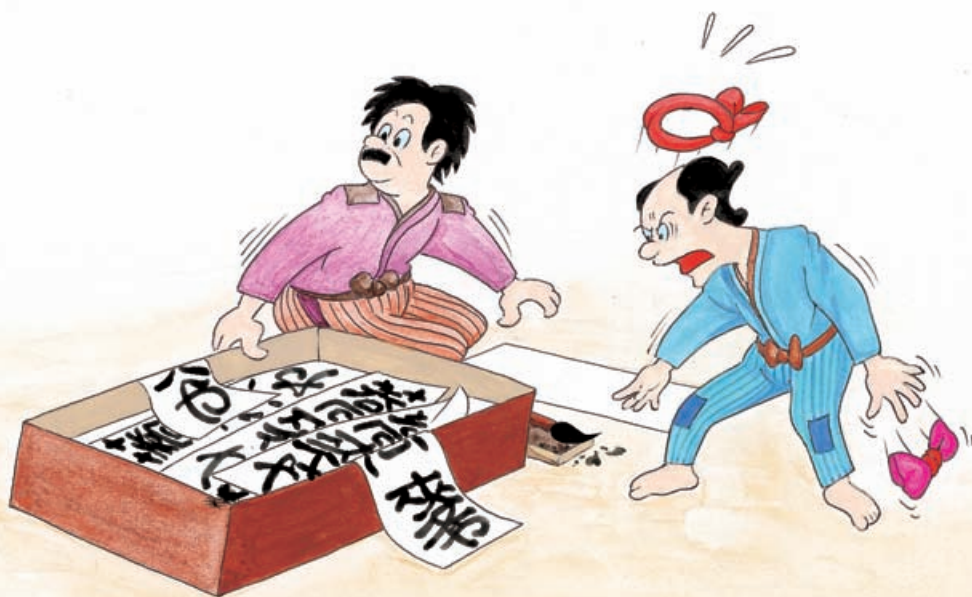
そのあとで、主人は、

「看板がないと、店の商売はあがったりになっちゃいます。そや、先生にもう一枚書いてもらおう。」

と思いつき、また先生の家をおとずれ、例の看板の代金を見せて、これこれと事情を話しました。

そこで、主人を座敷にあらせて、家の奥へ入っていった先生は、しばらくすると半櫃はんびつをかかえて、主人の前に置きました。

主人がいぶかしく思っていると、先生はその半櫃のふたをおもむろに開けまし



た。

すると、半櫃の中には、先生がそばやの看板を書くために練習した看板の下書きが、いっぱいつまっていました。

それを見た主人は、自分のなしたおこないに、深く恥じ入るのでした。

（高島市教育委員会発行「藤樹先生の逸話」より）

⑨ ふたのある木製の箱。

その二 荷車にぐるまが田たに落ちたお

ひとりの馬方が荷車にたくさんこめだらの米俵を積んでたんぼ道を通っていました。ところが荷車のかたほうの輪わが田に落ちてしまいどうすることもできません。馬方うまかたが失望ぼう、落胆らくたんしている様子ようすを知らながら、だれひとり、馬方を助けてあげようとする者がおりませんでした。

「これでは、もはや致いたし方かたがない。荷物にもつをおろして、積みなおすほかに策さくはなし」

馬方は、米俵をくくりつけている紐ひもを解ときはじめました。そのとき、ちょうど藤樹先生が通りかかりました。先生は、馬方の難儀なんぎしている様子ようすを見かねて、

「やあ馬子まご、私もひとかた入れて押おしてあげよう。汝なんじは手綱たづなをとって、しっかりと馬を引き立てよ。」

といわれ、はかまを高くかかげて、みずから田んぼのなかに入り、荷車のうしろに廻まわりました。



すると、いままで冷^ひやかな目で見ていた農民^{のうみん}たちも、

「われわれも。」

と力を合わせて、ようやく荷車を道に引き上げることができました。

(高島市教育委員会発行「藤樹先生の逸話」より)

- ◆ みずから田んぼの中に入り、荷車をおそうとした藤樹をどのように思いますか。
- ◆ 冷やかな目で見ていた農民たちは、どうして一緒に荷車をおそうとしたのでしょうか。
- ◆ 藤樹のどのような生き方を学びたいと思いますか。

その三 正直馬子しょうじきまこ

江州河原市宿ごうしゅうかわらいちじゆく（高島市新旭町）に、馬方うまかたの又左衛門またざえもん

門が住んでおりました。

ある日、加賀かがの国くに（石川県）からやってきた飛脚ひきやく
を軽尻③からじりの馬にのせて、八里先えのきじゆくの榎宿えのおおつし（大津市和迹）
まで行きました。

馬方は、家にもどり、馬のすそを洗おうとしたところ、鞍くらの下から財布さいふのようなものをひとつ見つけました。その袋ふくろのなかを詮索せんさくすると、なんと金子きんす二百両が入っていました。おどろいた馬方は、

「この財布は、さっきの飛脚ちがのものにちが違ちがいがない。」
と思うや、それを胴巻どうまきにくくりつけ、ただちに榎宿えのきじゆくへと走っていきました。



息^{いき}たえだえ旅籠^{はたご}につくと、馬方は飛脚におかっ言いました。

「おさむらいさん、なにか失^なくしませんでしたか。」

「いやあ、だいいじな財布をどっかで落としてしまった。」

「おさむらいさん、おいくらです。」

「金子^{きんす}二百両。」

「おさむらいさん、これですか。」

馬方のさしだした財布を見て、飛脚はたいへんよろこび、

「そなたに、当座^{とうざ}のお礼として十五両をさしあげたい。どうか、この金を受けとっていただきたい。」

と涙をながしながら、行李^{こうり}よりべつの金子をとり出し、馬方に礼金^{れいきん}を手わたそうとしました。

馬方は、

「おさむらいさん、お礼なんぞいりません。おさむらいさんの財布を見つけたので、そ

⑨ 荷物をつんでいない馬。

れをただ届けにきただけのことですから…」

と、旅籠を出て帰ろうとしました。

「いや、それでは私の気持ちがおさまりません。」

「…それじゃ、おさむらいさん、ここまで走ってきた駄賃として二百文だけ、いただくことにしましょう。これで酒を買って、みんなで飲みましょう。」

ほろ酔い気分になった馬方が、家にもどりかけようとする、飛脚は感にたえかねて、馬方の素性を問いました。

「私はなにも知りません。ただ、私の近所に小川村というところがあって、この村に中江与右衛門という先生がいられて、夜ごとに講釈をされています。私もときどきは聞きに行っておりますが、『人のものはけっして取ってはならない』と、先生はつねづねおっしゃっています。それで私は、その教えをただ守っただけのことです。」

馬方は、月のひかりを頼りに、暗い夜道を河原市へと帰って行きました。

三 資 料



今に見ることのできる
先人のあしあと

①示現寺

示現寺
熱塩温泉

高森山
791

熱塩加納

熱塩加納
総合支所

③入田付分教室

⑤太用寺 (矢部惣四郎・
五十嵐養安・遠藤謙安の墓地)

③遠藤謙安出身地

④蓮沼家

③小田付
幼学校跡地

喜多方

②生誕の碑

②五十嵐養安出身地

⑤蓮沼門三資料展示室・
愛汗の碑 (喜多方蔵の里)

⑤瓜生岩子記念館
(喜多方蔵の里)

①矢部惣四郎
出身地

④東条方秀出身地

喜多方IC

塩川

A

B

C

瓜生岩子

- E-1 ①示現寺
- E-3 ②生誕の碑
- D-3 ③小田付幼学校跡地
- E-3 ④長福寺(裁縫教授所後)
- D-3 ⑤瓜生岩子記念館(喜多方蔵の里)

蓮沼門三

- C-2 ①生誕の地(愛汗苑)
- C-2 ②高橋家
- F-2 ③入田付分教室
- E-2 ④蓮沼家
- D-3 ⑤蓮沼門三資料展示室・
愛汗の碑(喜多方蔵の里)

中江藤樹(藤樹学)

- E-3 ①矢部惣四郎出身地
- E-3 ②五十嵐養安出身地
- E-2 ③遠藤謙安出身地
- E-4 ④東条方秀出身地
- E-2 ⑤太用寺(矢部惣四郎・
五十嵐養安・遠藤謙安の墓地)



未来を拓く喜多方人

強い心・愛敬の心など、
豊かな心を持つ人になろう

人を思いやる心と敬う心を持つとともに、判断力、意志力、忍耐力、実行力などを養い、心豊かな自己を確立する。

命の大切さを知り、
心身ともに健康な人になろう

命の尊さを自覚し、21世紀を逞しく生きるため、健康な身体と健全な心を培う。

郷土の自然や文化、歴史、伝統に
誇りを持ち、より素晴らしい
地域を創造する人になろう

自我形成の背景ともなる郷土の自然や文化、歴史、伝統等に愛着を持ち、個性を生かし広く社会に貢献できる行動力を培う。

偉人の教え

愛敬

人を思いやり、
慈しみ、敬う心
「愛敬の心」
「豊かな心」

致良知

人が生まれながらに
持っている美しい心を
磨く努力をすること
「良心」「人の道」



なかえ どうじゅ
中江 藤樹

人の本心は善にして悪なし
これすなわち固有の良知に
して、人々皆しかり

中江藤樹は、近江の国の高島郡小川村(現滋賀県高島市)に今から380年前に生まれました。
藤樹の教えは、立派な道徳を身につけ父母や周囲に「孝」を尽くすことにあります。一人ひとりが自分の曇りのない心をつかむこと、つかんだらこの心に基づいて行動すること、そうすることで、親や子供を幸せにできるという考えです。
喜多方では約220年にわたりその教えが引き継がれています。

ちこうごういつ 知行合一

知識は行動できてはじめて自分のものになるということ
「強い心」「挑戦」

- ・なごやかな顔つきで人と接する
 - ・思いやりのある言葉で話しかける
 - ・澄んだ目で物事を見つめる
 - ・耳を傾けて人の話を良く聴く
 - ・まごころをこめて相手のことを思う
- 藤樹学の教え「五事を正す」より

ふくつ せいしん 不屈の精神

どんな困難にもくじけないこと
「強い心」



うりゅう いわこ
瓜生 岩子

年に小田付村(北町)

岩子は大変悲しみまし
幸な人が多いことを思
めに尽くそうと決まし

方の別なく傷ついた
また、貧しい人や親の
教育に奔走し、日本の
ええられました。

■喜多方市人づくりの指針は、個性豊かな人間の創造を期待し、家庭や地域社会、学校そして行政など、関係機関においてその実現を目指す努力目標とするものです。指針の名称は、「未来を拓く喜多方人」とし、5つの努力目標を掲げました。

一 社会の一員として人の道をわきまえ、

良心に背くことのない人になろう

社会規範や慣習にのっとった振る舞いができるとともに、他者との共生や他人への配慮など社会人として恥じない人間性を培う。

一 夢や目標に向けて何事にも挑戦し、

世界に羽ばたく人になろう

確かな知恵を身につけるとともに、常に創意と工夫をこらしながら実践し、グローバルな時代を逞しく生き抜くことのできる力を培う。

これらのことを受け、

特に家庭教育における親（保護者）の役割を十分に踏まえ、家族の絆を大事にしながら、健康で明るい家庭を築くよう努めよう

明魂

だれもが本来生まれながらにもっている明るい心

「愛敬の心」
「命の大切さ」
「良心」

総幸福

自分だけではなく、全ての人が幸せになれる道を目指すこと

「家族の絆」「人の道」
「地域を創造する人」

実行実働

感謝の気持ちでやりとげること

「強い心」
「社会の一員」
「挑戦」

愛なき人生は暗黒なり
汗なき社会は墮落なり



はすぬま もんぞう
蓮沼 門三

蓮沼門三は、明治15年に現在の山都町に生まれました。地元の小学校を卒業後、東京の師範学校に入学し、そこで、友達と共に人格を向上させるための修養団をつくりました。門三は98年の生涯をかけて「愛」心ですべての人と仲良く、努力の「汗」を流して社会を良くし、すべての人が幸せになる明るい世界をつくろうと社会教育と社会事業を行いました。

慈愛

親が子供を可愛がるような愛情

「思いやりの心」
「命の大切さ」

博愛

すべての人を平等に愛すること

「愛敬の心」
「思いやりの心」

進取

自ら進んで物事に取り組むこと

「人の道」
「挑戦」

自分ばかりよくなつたつて何にもならねえと思うのす

瓜生岩子（かゐ いわこ）は、文政12年に生まれました。夫や母に先立たれたが、世の中にはない、それらの人のために。戊辰戦争では、敵、味人を看護しました。ない子供達の救済とナイチンゲールと讃

「なかよく たくましく 生きる」は、
毎日の生活で児童生徒が目指す姿を示しています。

○ 人を思いやり うやま 敬います

- お年寄りや弱い立場にある人をいたわる
- 困っている人や悩みのある人を助け励ます
- 先人や目上の人、親、先生を敬う



○ 「こんにちは」「どうぞ」「ありがとう」を言います

- 明るい元気な声であいさつをする
- ゆずり合いの心や感謝の気持ちを忘れない
- 人の話をよく聞き、自分の考えや思いを素直に伝える
- コミュニケーションの力を高める

○ 勉強に励み はげ 体を鍛えます きた

- 本気になって勉強に取り組み、学ぶ喜びを体得する
- 進んで読書をし、本を読む楽しさを知る
- 規則正しい生活をし、進んで運動する
- 自他の命を大切にする

○ 人として恥ずかしい行いをしません は



なかよく たくましく 生きる

○ 喜多方を誇り 社会に役立ちます

- 良心にそむく行いをしない
- 社会生活のルールを守り、きまりの大切さを知る
- うそをついたり人をだましたりしない
- 人をいじめたり、差別したり、卑怯なまねはしない
- あやまちは素直に認め、反省する
- 礼儀を身につけ、ことばづかいを正しくする

- 喜多方の自然や文化・歴史・伝統の良さを知り、愛する心を持つ
- 社会に役立つことを進んで行う

- ・ みんなと力を合わせ、よりよい生活の場をつくる
- ・ ボランティア活動を進んで行う
- ・ 地域の行事に進んで参加する

わたしたちは
くじけない強い心を持って
目標に向かってやりぬきます

- 夢を持ち、目標に向かってくじけずに最後まで努力する
- 人の批評などにもめげず、それを生かしてさらに努力する
- まわりの誘惑や自分の弱さに負けない強い心を持つ
 - ・ 特にゲームやメディア活用のルールを守る
 - ・ 自分かつてな考えをおさえ、がまんする
- 学んだことは工夫をもって実行しやりとげる
- 広い視野に立ち、大きく羽ばたく意欲を持つ

めざそう！ 喜多方っ子



なかよくたくましく
生きる
人思い敬愛する
心は、心で
ぶら下げる言
勉強、励み、鍛え
人より恥づかし、ま
喜多方を誇り社会に
役立ちます
わたしたちは
くじけない強い心を持って
目標に向かってやりぬきます



これから私の

〈ワークシート1〉

年 組 名前 ()

※ 瓜生岩子の生き方や教えから次のことを考えてみましょう。

一 若松城下での戦いの際、敵味方の区別なく手当をし、食べものをあげる岩子はどう思いますか。

二 岩子が、小田付幼学校を建てたり、東京養育院の子どもの世話をしたりしたのは、なぜだと思いますか。

三 さつまいもでみずアメを作ることができたときの岩子の気持ちを考えましょう。

四 岩子の生き方から、あなたはどのようなことを学びましたか。



これから私の

ワークシート2

年 組 名前 ()

※「血ぞめの雑巾がけ」を読んで、蓮沼門三の生き方を考えてみましょう。

一 真っ赤にそまったバケツの水を見たと
き、以前バケツをけっ飛ばした学生は心
の中でどのようなことを思いましたか。

二 自分で決めた目標をあきらめないで
最後までやりとげたことはありますか。
また、やりとげた時の気持ちはどうでし
たか。

三 門三のどのような生き方を学びたいと
思いますか。



これから私の

〈ワークシート3〉

年 組 名前 ()

※ 「荷車が田に落ちた」を読んで、中江藤樹の生き方を考えてみましょう。

一 みずから田んぼの中に入り、荷車をおそうとした藤樹をどのように思いますか。

二 冷ややかな目で見ていた農民たちは、どうして一緒に荷車をおそうとしたのでしょうか。

三 藤樹のどのような生き方を学びたいと思いますか。



監 修 芳賀 忠夫(喜多方市教育委員会教育長)

編集＜編集委員会＞

委員長 鈴木 充正(喜多方市人づくりの指針推進委員会 委員長)
副委員長 鈴木 茂雄(喜多方市教育委員会学校教育課 主幹・指導主事)
委員 川口 芳昭(喜多方市瓜生岩子刀自顕彰会 常任理事)
委員 東条 貞一郎(修養団愛汗喜多方 副会長)
委員 沢井 清英(藤の樹会 事務局長)
委員 齋藤 泰文(喜多方市立第一小学校 教諭)
委員 瓜生 理恵子(喜多方市立豊川小学校 教諭)
委員 吉川 紀子(喜多方市立慶徳小学校 教諭)

イラスト 和田 文彦

協力団体等 喜多方市瓜生岩子顕彰会
公益財団法人修養団
修養団愛汗喜多方
藤の樹会
滋賀県高島市教育委員会

「先人からの贈りもの」

平成26年 3 月28日発行

著作者 喜多方市教育委員会（喜多方市字西四ツ谷31）
発行者 喜多方市教育委員会
印刷 北斗印刷株式会社

